

進捗状況の概要（2 ページ以内）

① 大学改革の加速

本事業の中心となる取組は、受験生のもつ学力を総合的・多面的に評価する新たな A0 入試＝新フンボルト入試の設計と実施である。H26～H27 年度にかけて入念な制度検討を行い、H28 年度より新フンボルト入試を本格的に導入し、H30 年度までに 3 度にわたる新フンボルト入試を恙なく実施した。H30 年度についても前年度実施時における課題や問題点を細部にわたって析出し、一次選考のプレゼミナールおよび二次選考の図書館入試・実驗室入試の実施体制・評価方法などをブラッシュアップし、十分な改善策を講じた。3 年目となる新フンボルト入試についても、多数の参加者をえて 9 月 29・30 日にプレゼミナールを滞りなく実施し、10 月 20・21 日には二次選考を円滑かつ十全に実施した。さらに合格発表後には合格者全員に上級生をチューターとして配置し、丁寧な入学前教育を実施した。また前年に引き続いて高校への訪問調査や多数のメディアや大学関係者からの取材要請、幹事校である東京農工大からの AP 事業広報パンフレットへの出稿依頼などにすべて対応するなど、本事業の広報活動にも可能な限り尽力した。こうした堅実な事業運営のもと、新 A0 入試に対する内外の評価、関心は依然として高く、大学入試改革事業（AP 事業テーマⅢ）のモデルケースのひとつたり得ていると思料する。また新 A0 入試の成果、実施状況をふまえ、理系諸学科ではこの入試方法を推薦入試と統合させて総合型選抜として実施する案が固まっており（予告として公表済み）、本事業の効果が本学の入試制度全般の改革を加速させ再構築するための触媒、起爆剤として作用している。

② 事業の実施体制

学内の実施体制については、前年度の仕組みを基本的に踏襲し、学長のリーダーシップのもと、教育担当副学長および入試推進室長が実務面を主導している。事業推進の中核組織は A0 入試専門部会（各学部選出の教員 20 名から構成）であり、入試推進室や入試課と協同しつつこの部会を制度全体の細部にわたる改善・見直しの場として活用し、定期的かつ長時間の審議を経て細部事項の検討・改善（本入試の PDCA サイクル）を実施している。さらに同専門部会の主導のもと、各学部各学科の教員に対して適宜協力要請がなされ、全学的な入試実施体制が構築・整備されている。またプレゼミナールセミナー担当者との打ち合わせ、附属図書館との連絡調整等を綿密に行い、全学一体となった総合的な入試実施体制を構築している。

③ 事業の実実施計画・継続性

取組の成果については、当初申請した計画におおむね沿ったかたちで順調に進捗している。平成 30 年度実施の第 3 回新フンボルト入試では、一次選考のプレゼミナール、二次選考の図書館入試・実驗室入試のいずれも恙なく実施することができた。加えて合格者に対する入学前教育、高校へのヒヤリング調査、各種広報活動など、当初予定していた事業内容はほぼ達成したと認識している。その結果として、一次選考のプレゼミナール初日参加者は 364 名、このうち A0 入試受験者は 173 名（出願者は 177 名）を数えた（定員に対する倍率は 8.65 倍）。受験者数は H29 年度（192 名）より減となったが、それでも多くの受験者およびプレゼミナールを受講したいという高校 2、3 年生が多数エントリーし、2 日間の全日程・全メニューを盛況のうちに終了することができた。プレゼミナールでのレポートおよび各種出願書類の審査によって二次選考には 80 名が進み、最終的に 23 名の合格者を得ることができた。新フンボルト入試は、蓄えた知識の多寡を問うのではなく、その知識の応用力・活用力を問う入試である。一次、二次選考の諸課題をこなしていくなかで受験者はそのさまざまな力（ポテンシャル）を評価される。この入試形態が「多面的、総合的に評価・判定する大学入学者選抜へ転換」する入試のモデルケースとして十分に機能しているものと判断する。また 8 倍以上の倍率を 3 年目においても維持できた点（一般的に新入試は導入 2 年目以降に倍率がかなり下がる傾向がある）は、高校生からも魅力的であり、「挑むに値する」という高評価をある程度獲得している証左であると推量する。

補助期間終了後の継続発展に向けた取組については、既に業務軽減化を図れる部分については省力

化等の策を次々と講じている。ただし、前提としてこの新フンボルト入試は多大な労力をかけなければ実施できないしくみであり、単純かつ極端な効率化・業務の軽減(縮小)は制度の根本理念を毀損する恐れがあり、角を矯めて牛を殺すことのないよう慎重な配慮を必要とする。補助期間終了後は、後継となるような外部資金公募に積極的にアプライするなどの措置を講ずるとともに、制度の理念・骨格を維持するための基礎的経費を本学自前の財源から充当していくことが確定している。新フンボルト入試の継続方針、そのための必要な予算措置も執行部(学長戦略機構会議)が了承しており、制度の持続的運営は担保されている。また新 A0 入試が軌道に乗り、ポテンシャル豊かな「尖った」「(知的に) おもしろい」学生が多く入学してきていることで、教職員の意識を刺激し本事業継続の大きな原動力となっている。とくに強調しておきたいのは、A0 入試の不合格者が本学の他の入試(推薦入試や一般入試前期日程)に再チャレンジし、少なくない数が最終的に本学の門をくぐっている点である(H30 年度は、A0 受験者 173 名中、23 名の A0 合格者を含む計 47 名が本学に入学。なおプレゼминаールのみ参加し、他入試で合格したものは 4 名を数える。ちなみに初年度は 48 名、2 年目は 57 名が最終的にお茶大に合格している。したがって過去 3 年間には新入生約 500 人の約 1 割が A0 入試を経ていることになる)。こうした本事業の効果を FD 等で学内に周知しつつあり、それによって教職員の理解と意識をポジティブに高め、本事業の安定的な継続発展の基盤とする。

④ 事業成果の普及

学内外への波及効果については、本学の入試改革プランが AP 事業に採択されてから今日まで、多くの取材や訪問調査、あるいは講演依頼を多数受けてきた。基本的に取材や訪問調査等の依頼にはすべて懇切に対応し、機会ある毎に本事業の成果と意義を強調している。

本学の入試改革に対するヒヤリング希望には原則として全て応接した。テーマⅢ幹事校である東京農工大の取組にも参画し、電通大で行われた全国大学入学者選抜研究連絡協議会にてブースを出展し、本学の入試改革・新フンボルト入試について説明し各大学関係者からの質問等に対応した。また農工大が企画した AP 事業の広報誌の作成に協力し、AP テーマⅢ合同報告書に紹介記事を掲載した。また文科省から依頼のあった AP パンフレットの原稿も作成した。愛知教育大からの訪問調査、岡山大学薬学部からの新フンボルト入試の講演依頼に対応した。全国 3 会場で行われた丸善アカデミックセミナーにおいて、多数の聴衆を前に新フンボルト入試についての講演を行った(福岡、東京、大阪)。東京都高等学校図書館研究会の依頼講演を行い、またリクルート「大学の約束」、コアネット教育総合研究所、ベネッセ進研ゼミ中学講座等の取材を受け、いずれも特集記事となって公表された。これらは本学 AP 事業の成果と意義を広く社会にアピールするものである。さらに本年度末の 3 月 14 日には、本学教学 IR・教育開発・学修支援センターの主催で、『教学 IR : 入口から出口までの内部質保証』と題する公開全学 FD/SD 会が開催され、その冒頭に「新フンボルト入試の制度設計と初期実施状況」という講演、さらに「補遺 特色入試選抜者の修学行動と成果」という報告を行った。中間評価で本事業の成果を FD 活動等で浸透させること、という課題に応える企画であり、新フンボルト入試の意義・成果を学内外に周知する絶好の機会となった。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

本事業においては、新フンボルト入試を経て合格した学生、さらには本入試を不合格になりながらも他の入学者選抜試験で入学した学生(プレゼминаールの経験者)が、入学後その持てるポテンシャルを発揮し、他の学生と入り交じることで触媒として作用し、本学の研究教育で様々な能力を発揮していくことが望まれる。彼女達のもつ独創性やしなやかな感性が、全学の刺激となり活性化に繋がることが重要である。そのためには入学者へのヒヤリングや追跡調査によって、不断に合格者のパフォーマンスを測定評価していくことが肝要である。さらに、2020 入試改革にむけて新フンボルト入試の成果を検証した上での諸改革、すなわち理系における A0 入試推薦入試との統合・定員拡大(すでに確定し公表済み)、アドミッションポリシーの改定など、全学的な入試制度全般の見直しと改革が進行しており、これらが本学の教育研究制度のさらなる改善・拡充に寄与していくものと考えている。